

ベストピア Bestopia

小原 靖夫

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十三年七月
第二九三号

看護師さんへの賛歌

12年前になりますが、看護リーダーのための専門情報誌「師長主任業務実践」(産労総合研究所)の巻頭言を2年間書かせていただきました。医療の専門外からのメッセージですから患者の立場という視点で”看護師さんへの賛歌”として感謝のメールを送りました。

再びお声がかかり、隠退前の身で少し躊躇しましたが、それ故にもっと円熟したメッセージが送れるかも知れないと謹んでお受けしました。1100字という範囲で出来ることは何か毎月考えています。自分の記録としてベストピア誌上に残したく、その一部を記載します。

(1) 受けとめる力

東日本大震災は未曾有の被害をもたらし、余震がやまず、原発の恐怖は収まらず、被災されておられる方々の艱難、苦悩はいかばかりかと全国民が思いを寄せ合っています。一日も早い収束と復興の始まりをお祈りします。

被災地のニュースを毎日見る度に、映像にならない厳しく過酷な働きの中にある看護師さんの奮闘と苦労を思い、頭を垂れています。

この職業を選択した動機について尋ねますと「看護師である母の姿をみて」と答えられる方が多くいます。この震災で亡くなった尾形志保さん(宮城県東松島市野蒜町・22歳)もその一人でした。患者さんに

日々真剣に接する母の姿に感銘を受け、将来は「友達の赤ちゃんを、みな取り上げるんだ」と助産師を志望していました。志保さんは地震後、「津波がこないで欲しい」と祈っています。死を覚悟して「明日で人生が終わるなら、友達皆に連絡して、最後は家族と過ごしたい。楽しかったよと伝えたい」との冷静なブログを残しています。

その後、あの怒濤のような波が襲ってきました。彼女の遺体は5日後、お父さんと弟さんと共に発見されました。志保さんは2月に看護師試験を受験、発表を待ちました。その合格が、母親の妙子さんに判ったのは3月末でした。死亡者には合格書は交付されないとの規則を超えて4月18日「特別の合格書」が妙子さんの手にわたされました。妙子さんは3月11日当日は病院に勤務中で、自宅にいた家族のことを心配しながらも次々と目の前で起こってくる患者さんへの対応、看護師としての使命を果たすべく2週間近くは不休不眠の勤務を続けられた。「今、ここで、何をなすべきか」をどんな過酷な状況の中でも冷静に判断し現実を『受けとめる力』は包容力という言葉を超えた何かを感じるものです。

「患者さんを早く避難させることで必死でした。避難の途中で亡くなる方もいらっして一私も死を覚悟しました」と語る日比優子さんは16年前に阪神大震災の被災経験をもつ看護師さんです。「患者さんの支援に没頭する日々が過ぎた後、自分の体に異変が生じ、地震のニュースに接するたびに、息が苦しくなり、体が震え、涙が止まらない日々がつづいていた。」というトラウマを

乗り越えて3月15日車で神戸を出発、原発の影響で待機指示があったにもかかわらず「今、被災地に入らなければ……」との思いで、16日には塩釜市の病院で救急看護や避難所の巡回を続けられた。「話を聞いてあげることが心のケアにつながる」と自らの体験を生かしての活動をされました。

「受けとめる力」とは自己よりも他者を優先する力、他者のために自己を超える大きな働きが感じられます。

看護師さんはこのような力をもって日々使命を果たされています。その姿に敬意を表します。

(2) にもかかわらず

日本は3・11を転機として地理的断層の崩れだけでなく、精神的文化的な断層も大きく崩壊しました。特に原発の被害は期限のない長期間にわたって現れつづけると予想され、子育て、懐妊に不安を覚える女性が増加し人口の減少に更なる拍車がかかります。私の住む神奈川県西端は福島から約250km離れていますが、新茶の被害もあり、危機に敏感な子育て中の若い夫妻が石垣島に転居したとの報道までありました。このようなときに、若い人に向けてどんな励ましの言葉をかけていいのか迷いましたが、私が生かされてきた二つの言葉を記させていただきます。

40年前に起業したとき、右上のような標章を名刺に刷り込みました。「今、ここ」を一所懸命に生きて将来は対立するものと握手ができる平和な世界を夢見ていたのです。

この時の「今、ここ」は貧しさから脱出するために懸命に生きるという短期目標にすぎませんでした。今こことはいいながら、気持ちはいつも明日にあり、無常の明日を確信して、目標に向けて合理的に生きてい

ました。お恥ずかしいことですが、この矛盾した考えに気づいたのはつい最近のことで震撼に堪えません。「大切なのは、かつてでもなく、これからでもない、一呼吸、一呼吸の、今だ」という坂村真民さんの詩が「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む」という真実味を帯びて迫ってくるようになりました。只、これは短絡的にこのようになるのではなく、「にもかかわらず」という言葉がワンクッション入ります。

サラリーマン時代の私は「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ、花を買ひて、妻としたしむ」(石川啄木)をよく口ずさんでいましたが、あるとき、「雨ニモ負ケズ」(宮沢賢治)への転換がありました。その時、理屈なしに腹の底からわき出てきたのが「にもかかわらず」でした。この言葉は、まず、現状をひとまず否定しますが、否定から抑揚へ向かわせる力があります。新しい行動が芽生えるエネルギーを持った言葉です。

人生には数えられない、計り知れない艱難苦難がありますが、その中において人は祈り、今の苦しみにも「にもかかわらず」希望を持ち得る力が与えられていることを私は確信しています。

医療界に従事する人々は「今、ここ」を本当に真剣に生きておられます。手術中の医師は、一瞬一瞬命がけの真剣勝負をされています。それを援助する看護師さんの手も目も唯ひたすら一つの命に向かって動いています。家族が見放した患者さんをも看護してくれます。常に患者になる立場にある私たちは看護師さんの働く姿が「にもかかわらず」「今ここ」を一所懸命働いておられるのを見、頭を垂れます。

一方、働く現実には外部には言えない矛盾に満ちています。人間の弱みや本音が赤裸々にでる職場だからです。毎日が苦難と

の戦いといっても過言ではありません。しかし、皆さんは「にもかかわらず」で気分転換をなし「今、ここ」を生活している証人として常に尊敬される人々なのです。

(3) 人生の5S

自然界にある四季に彩りをつけて、人生のライフサイクルを象徴する、青春、朱夏、白秋、玄冬という言葉があります。それぞれに一定の長さがあり、成長と活動の特徴がありますそして、その期間は1回限りで進んでいくところに自然界の四季と異なります。今、私は静かに玄冬に入ろうとしており、そのことを心から期待しているところがあります。それは私の玄冬に対するイメージがしからしめるところですが、一言で表しますとそれは「清澄」であって陰鬱や暗さはありません。楽しみつつ次の準備ができるということはとても幸いなことと感謝しています。

さて、次の準備のために10年に一度大きな5Sを実践してきましたが、今回は最後と覚悟して最大級の5Sを試みています。

5Sとは申すまでもなく、①整理②整頓③清掃④清潔⑤習慣のことです。この一連のサイクルの最初に整理がくるのは”うべなるかな”といままでにない感慨深さが迫ってきます。それは整理の本質が”捨てる”ことにあるからです。生にあまり要領のよくなかったせいもあって現役のままでは次の準備をすることができないことを謙虚に受け入れていましたので、離職は待ち望んでいたことです。困ったことは職場を離れるとなると少しばかりの書籍を自宅に持ち帰らねばなりません。そのスペースが必要になってきました。自宅にある本と併せて捨てるべき書籍を捨てなければなりません。まだ読まれていない貧しい中必死の思いで買った本を捨てるのは2回目です。心の底が破けていく思

いです

決断とは”かくもおもいこと”であることを実感しています。人の生活は毎日決断の連続ですがスピード化とマニュアル化で感じている暇がありません。

玄冬における整理とは身軽にすることにほかならず、家族からは喜ばれることですから、そこに救いがあります。ところが、老化する頭脳を受け入れつつ心地よい生活をするには整頓が欠かせません。整頓とは”ちゃんと元に戻しておくこと”です。共同生活には基本中の基本ですが老化する頭脳は、よく言い訳をします。言い訳は、本人にはそのつもりは無いのですが客観的にみると他人のせいにしてしているので共同体が不快になります。「整頓には例外なし」これが唯一の成功要因です。

清掃は整頓ができると苦も無くできるのは不思議ですが、気がついたらすぐすることと丸く掃くのではなく四角く掃くこと、この2点が大切です。清潔は①②③の継続でもたらされることです。その継続は習慣によって担保されることになります。ここまですれば生活環境は快適ですし捜し物時間も短縮されます。私の場合は整頓の習慣化が今後の課題です。

皆さんの職場にも5S運動があると思います。更に進化した5Sを基本方針にしておられる病院があります。Speciality Safety Speed Smile Spirit ですが核になっているのが

最後のSpiritです。全身麻酔での手術年間1000を超える整形外科の病院ですが、院長の口癖は「うちはみんなにSpiritがあるからなあ」です。院長のSpecialityを最大限支えて不可能を可能にかえているのが驚くべき看護体制なのです。

(4) 付記

5Sについてはしばしばベストピアで取り上げてきましたが、自ら玄冬に立ちジーンと身にしみこむ思いで書きました。自宅の身の回りの整理はでき、今度は事務所の整理にはいります。整理とは過去を捨てることでもあります。痛みが伴いますが、いずれは直面することで元気なうちにできることに感謝をしています。今回は妻の甚大な理解と協力のもと書斎も整備され喜びが甚大で快適な環境が更に深まりました。

これからの課題は進む加齢の忘却システムをいかに最小にするかです。そのためには整頓が一番私には大事です。「例外を作らない」ことが整頓の秘訣です。「必ず元に戻す」時間をかけてもいいから「例外を作らない」。もう忙しいと言わなくてもいい環境にもなってきました。「例外を作らない」習慣をつけることが躰けです。老害を巻き散らかさず、スマート（s）に、サラット（s）爽やかに（s）更に自由に（s）健康やかに（s）と5Sは更新自由です。

小原 靖夫